お金は命（下）

ほかの特養老人ホームでも同じであろうが、私たちのホーム任運荘では一人平均二百万円もの預金である。額が額だから家族に金額収支を通知することにしたら、意外にもお年寄りから抗議、「家の者に言わんでくれ」と。「子供ではない、自分の金は自分のもの」とも。人間が最後まで自立的であろうとするためには、確かに「自分の金」はぎりぎりの条件である。老いにとってこそお金は命である。

雲仙・普賢岳の大災害で、お年寄りの自治会で見舞金の件が出された。ある老女は反対を叫んだ。「敗戦で引き揚げる時、腹にまいたお金も取りあげられ無一文で下関についた。その時、政府にしてもらったのは、頭からＤＤＴをかけられただけ。そのことは一生忘れんで！」お金は命、この怨念をだれが笑えよう。

しかし、吐き出したことで怨みも少しは晴れたのか、深江町への七万円に彼女の一灯も輝いていた。

ものの言えないＴさんは孫の入学祝いにポンと十万円。お顔には満足感が長いこと

漂っていた。老い人たちは確かにケチのように見えるが、自分のためだけでケチであることは少ない。少しでも多く家族に残そう、葬式代だけは迷惑をかけまい、永代供養分は用意しておこうなど、精いっぱい最後の最後まで自立を貫こうとしているのである。

終わりに私事にわたるのを許されたい。石ころ道では父は履き物を脱いで歩いた。かく一事が万事、一生をケチの権化のようにして貯めた二千万円全額を、任運荘・騰々舎建設に出してくれた。その父ゆきて十余年。今にして知る。父よりずっと私こそケチであることを。

（一九九二年六月十六日）